

白熱光

米満優希

中華街裏手のジャズバー、の店内は細長いカウンターと数席のテーブル、で私はジンジャーエール 辛口、だと居座りやすい、を注文した、レコード棚 並んでいるキーポトル、越しのマスターはバディ・リッチ、アルバムジャケットが壁に飾られた、に似ている、はサーブが済んだらスマートフォン、というのも日曜日は客が少ない

手元を照らすランプシェードの電球、のフィラメントは染色体めいた、はペールオレンジの光を発する、が遡ること二日分の日記、遡行しない日記はあるのだろうか、を書きたい、ためには今ひとつ照度が足りないが、Nが同棲に向けた共同口座、を開設した事や、ぷつ、MとAが太極拳を始めて、馬の背中を撫で、たことはないはずなのに、るような型の話、ぷつ、を思い出すのに時間がかかっていると、ぷつ ぷつ、ぷつりと切、れては冷えてしぼんだ電球、を「今度のは明るい」、マスターが新しいのと交換してくれる

ドアが開き十一月の夜風が吹き抜けた、ので早くドアを閉めてほしい、ら一人の外国人が私の隣に座り、ジントニックを注文した、薄手のニットだけでは寒い、まで日記に書いたの、で今日が終わってほしい、肘をついた外国人、は「ニュルンベルクから来た」と言う、視線を落としてストローに口をつける私、のは閉口の仕草、左利きの彼、ということだけ面白い、が伝票、カクテル 七五〇円 チャージ 三百円、の裏にフリーハンドの地図を描いて示す、について私のエチケットは空間性に話題を終始する、日記をしまいフォービートに耳を傾けている、ことにするともう話しかけられなくな、つた後に考れば私の生まれ街は、潮香をまもって、山間に家明かりが並ぶ小銀河、被曝の歴史とともに語られる

最後の入退店から、アルバムが二枚かかった、白熱電球のフィラメント、は体細胞分裂を開始、や膨張するガラス球、で照らされる店内は、暖をとる